
Hikikomori of the Dead

めいぞ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Hikikomori of the Dead

【NZード】

N1367T

【作者名】

めいそ

【あらすじ】

ひきこもつてゐるうちに、世間にゾンビが蔓延してたつて話。

もともと18禁に登録してたけど全然18禁じゃないことに気がついたので、一般に投稿。

僕はその数日、強烈な鬱と頭痛に襲われて、死にかけの虫みたいに身悶えていた。

パソコンと向かい合う事すら億劫だった。眠る為にキッチンから強そうな酒（親の晩酌用のボトル。ブランデーとアブサン、それに白ワイン）をコップ何杯分かくすね、酩酊によつて苦痛を忘れることに全力を注いだ。

僕を内側から蝕む禍々しい化け物が、アルコールで麻痺したかのように苦痛が軽減され僕は一時の休息を得た。でも僕は知っていた。それが一時しのぎでしかなく、癌患者がモルヒネで痛みを和らげるのと同じ行為でしかないことを。鎮痛剤で癌が治っていくわけではないのだ。

眠気がやってきた。アルコールに招待された睡眠では、寝つきが浅くなる事をわかつてはいたが僕はそれでも眠ることにした。考えるのをやめる以外にいかなる選択肢も僕にはなかつた。

夜が朝になるくらいの時間眠つた後、急に目が覚めた。目が覚めても僕は体を起こそとはしなかつた。見慣れた天上材のシミを意味もなく見つめる。さつき夢で見た色んな出来事が頭に浮かんでは消える。過去の失敗がフラツシュバツクして何度も頭を振る。忘れよう。忘れなければならない。

大きくため息をついた。

いいかげん睡眠を諦めて、久し振りにネットでもやつてみようかと、僕は立ち上がり、PCを設置してある合成樹脂制のデスクの前に座つた。色褪せたウレタンチェアが悲しげに軋む。デスクチェストからメガネを取り出し、PCの電源を入れ、ブラウザを開くとホームページとしてGoogleが表示された。

僕はお気に入りから2ちゃんねるのヒキ板を選択して、似た境遇の人間の集まる、空氣の淀んだスペースへ入つて行った。このカビ臭さが何故か妙に居心地がいい。

スレッド一覧にざつと目を通した。一週間前とほとんど変わらない。ここは時間の流れが遅いようにさえ感じる。

「ん……？」僕は上方に表示されているスレッドタイトルに興味を引かれた。

3 : この世オワタヽ(^o^) / (542)

何を今さらと思いつつも、厭世感に浸るのもいいかとそのスレッドを開いた。

1 : (-)さん : 20XX/XX/XX(金) 18:3
5 : 15 ID : ? ? ? 0

アメリカで奇病大流行！ 水際対策とか無理だろwww

この世の終わりきたか？

大人しく部屋にこもってるヒツキー大勝利！！！

予想通りとはいえ僕はがっかりした、この手の感染症の話はその度「パンデミック（世界流行）」としてマスクに日々的に取り上げられるが、そのニュースがマスクの飯のタネとして以外の役割を果たしていたかというと疑問が残る。まあマスクが売れる程度だろう。なんにせよ僕には関係ない。

ただ、読み進めていくうちこの手のスレには場違いな単語が頻繁に使われていることに気が付いた。

ゾンビ……？

まどろつこじいので一番下まで画面をスクロールした。

540 : (- - -)さん:20xx/xx/xx(土) 09:
21:23 ID:?????0

俗にzombie disease（ゾンビ病）と呼ばれる一連の病気は、数日前、メキシコとの国境の町として知られるアメリカ合衆国テキサス州エル・パソを発端として瞬く間に南アメリカ全土へ広まつていった。

日本でも様々な要因から対応が遅れ、厚生労働省は7日（昨日だ）の夕方、都内に国内初となる感染者が出たと発表した。感染源は潜伏期間内で検査に引っかかるなかつた輸入動物という説が強い。

病状としては、数時間から数日の潜伏期間を経てから40度を超える発熱が起こり、八割が数時間で心停止。その後呼吸が止まつたまま動き始めるというもので、見境なく生きた食物を求めて辺りの人間や動物を襲う……（中略）……空気感染はしない模様、患者から噛まれることによつて血液感染を起こす。……（中略）……発症前、発症後共に治療法は見つかっておらず、ワクチン等の開発が急がれている。

541 : (- - -)さん:20xx/xx/xx(土) 09:

21:59 ID:?????0
<<497

いやこんなん来たらヒッキーは百%死ぬ

542 : (- - -)さん:20xx/xx/xx(土) 09:

2
2
:
1
0
I
D
:
?
?
?
0

やつた！

最後の審判じゃね！？

神様ありかどニ！！！

僕はそれから数時間ネットサーフィンを続けた。最初は絶対嘘だと思った。だってこんなあんまりにもネタくさすぎる。どこかのゾンビ愛好家がそれっぽく書いて馬鹿を釣ろうとしているのだと。けれど他の場所でもパニックは広がっているようで、ニュースサイトのソースもあった。中には家族がこの病気に掛ったというレスもあった。

この騒ぎは2ちゃんねるの多くの一ート・ひきこもり層には大ウケしたようで、この件に関するスレがいくつも立てられ、みんなヤケを起こしたようにwwwと草を生やしまくっていた。かくいう僕もその内の一人で、これで世界が滅べばいいと思つていた。祝杯のつもりでまた酒を煽つた。するとだんだん眠くなつてきて、僕は再びベッドに入ることにした。

気づけばまた眠っていた。もう部屋の中は暗い。

ところで気のせいか、外が騒がしい。僕は寝起きで頭がはつきりせず、工事でもやっているのだろうかと分厚いカーテンを少しだけめくり、窓から外を眺める。辺りは日が暮れかかつて薄暗くなつていた。

この辺は郊外の住宅地で、普段は人なんて入れ違うレベルで見かけるだけなのに今日は見える範囲一帯の道路や他人の庭に人がいた。全部で三十人程度だろうか。そのうち数人は他の大勢から逃げるよう走り回っているように思えた。

異様な光景だった。

「ギャアアアアア！」とガラス越しにでも叫び声が聞こえた。今見ている方から目を離して声の方に振りむくと、うちのブロック塀の前あたりで、若い女性が年格好様々な数人の男女に掴まれ、引っ張られ、肩の辺りを噛みつかれていた。

一人がそうすると周囲も餌を奪い合うように腕や足、頭などに次々と噛みついていく。女性の噛まれた部分から血がドクドクと流れ出る。

捕食者たちはブチブチッと女性の筋繊維を引きちぎり、口から新鮮な血液を滴らせながらそれを咀嚼する。口を大きく開けて乱暴に喰うものだから口から赤や白の食べくさしが吐き散らかされる。襲われた女性の手足がピクピク痙攣し、やがて止まった。

僕はカーテンをサッと閉じる。気分が悪くなってきた。

想像していたよりも僕はこの状況に恐怖を感じていた。普段は死にたいとまで思っていたのに、急にこのような惨劇を見せつけられるとな本能的に死の恐怖が湧いてきて、体が震え出した。

僕はPCにスイッチを入れようとする。だが、電源が入らない。カチッカチッ、何度も押してもPCは反応を示さなかつた。くそ、故障か？

ギィイ 下階からの階段が軋む音が聞こえた。音はゆっくりと少しづつだが大きくなつていく。

僕は体が硬直した。なぜだか音を立てないようにしようと決意した。足音は部屋の前を素通りして両親の心室の方へ向かつて行つた。

母さんか……？ いや、いくらなんでもこんな時に声を掛けない

なんて……。だけどそうじやないとしたら今の誰なんだ？

動悸が激しくなるのを感じた。独りぼっちには慣れていたが、一層強い孤独感で胸が締め付けられる。

僕は本当に独りなのでは……？ 恐怖や不安や寂しさなど、感情が一気に爆発して僕は涙を零していた。

ひとしきり泣いたあと僕はすっかり冷静になった。というより疲れてしまった。僕は床に座り込み静かに布団を引っ張つて、中に入ぐるまつた。

このままこの家の中にいるのが安全なのかどうか僕には判別できなかつたが、外に出ようとは思わなかつた。このまま様子を伺つていよう。

外も静かになつてきた。壁掛け時計は午後六時半を示している。

僕はゆっくりとベッドに背をもたれかけた。いつまでも強張つたままでいられなかつたからだ。

そしてその時、緊張がゆるんだ瞬間の何氣ない行動が自らを窮地に追い込んでしまう事を知つた。くるまつていていた布団の膨らみが、ベッド横のナイトテーブルに置かれてあつた小型の目覚まし時計を床に落としてしまつたのだ。ガタンと、一〇センチ程度の時計がフローリングに跳ね返る音が響く。静寂の中にあつては大きすぎる音だつた。

全身の体毛が逆立つのを感じた。

おまけに時計は気でも狂つたようにリリリリリリリリとけたたましく叫び始めた。ここ何年も使う事なんてなかつた時計。彼も孤独に耐えられずついに癪癩を起してしまつたのだろうか。

バタンッ！ 隣の部屋で何かが倒れた音がした。それに続いてこちらに近づいてくる足音。この部屋にはもういられないのだと僕は

悟った。

部屋のドアに体当たりして僕は一階の廊下に出る。ほとんど真っ暗だ。僕は躊躇ないようにできるだけ急いで一階へ下りようと頑張る。

「ウアアアアア」

後方から声帯を搔き鳴った様な低い獣の声が聞こえる。僕は一度も振り向かず玄関まで一直線に走る。玄関ドアを開いた。

外にはほんの数メートル先にはさつき喰われた女の死体が転がっていた。顔の皮が丸ごと剥がれて赤いりんごが首の先についているように見えた。そしてその手前には黒い人影が肩を落としてふらふらとさまよっているのがわかつた。

その影は僕に気付くと、フシュウウと喉笛を鳴らして僕に両手を伸ばしてきた。

勢いよくドアノブを引っ張る。蝶番がきしみ、ドアは異界をシャットアウトした。

僕は呆然としていた。口をポカンと開けて阿呆みたいに。本当の恐慌では認識までパニクってしまうのだろう。僕は肩を何者かに握られるまでただひたすらに硬直していた。

肩のひんやりとした感じ、それに気が付いて僕が首をひねって背後を見るとそこには青白い顔があった。白髪交じりの黒髪は半分くらい抜け落ち頭皮が見えている。眼球はあちこちを向き方向が定まらず、目頭には黄色いヤニが大量に分泌されている。鼻の形は崩れ、剥き出しの歯茎は紫に変色し歯が何本も抜けて、その場所からはだらだらと腐敗した血液が噴出していた。

それが母親の顔と分るまで時間をずいぶんと要した気がする。

僕はこんな大きな声を出したのはいつぶりだらうとこりへりに叫んでいた。叫びながら思いつきりそれを突き飛ばして、脇の傘入れに入つてあつた金属バットを引っこ抜いて、その頭を何度も何度も殴打した。

ハア、ハアと息を切らす頃には、その頭部は潰れ、もう動かなくなっていた。

僕は吐いた。玄関の誰かの靴の上に、タイルの上に嘔吐物をぶちまける。胃液しか残つていなかつたから、後半はえずくだけで何もでなかつた。玄関ドアがさつきのやつに乱暴にノックされていてうるさい。

僕はヨタヨタとバットを杖にしながらリビングまで歩いて行つた。

カウチソファーにドスンと身を投げ、床を見続ける。バットの先端にこびりついた黒い血がぬらぬらと光つてゐる。このバットは僕がまだ野球少年として元気にやつていたころのものだということに気がついた。

あのころの僕を忘れられなくてこつまでもあそこに置いたままにしていたのだろうか、僕はもとの母さんの顔を思い浮かべて、それからまた泣いた。

三時間くらいして、ようやく僕はようめきながらも電源の切れた冷蔵庫を開け、中の食材を物色しむさぼり食つた。僕はもはや何も感じていなかつた。ただ本能のままの行動だつた。

そのまま二日ほど家の中を過ごし、食糧が尽きると玄関から外へ出た。

前見た時よりも腐敗の進んだそいつらがそこら中にいたがバット

で好きだけ殴り飛ばした。長いひきこもり生活を経た後で体は酷く痩せ細つていたが、それにしてもそいつらは弱すぎた。

僕は保存のきく食料品を集めたり、安全な場所を見つけたりと平気で外をうろつきまわった。

僕が気づいていたことは今まで外に出る時感じていた恐怖などもうどこにもなかったこと。なぜならあの恐ろしい、人間のような生き物なんて見かけなくなっていたからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1367t/>

Hikikomori of the Dead

2011年10月3日15時05分発行